

英語科を中心とした提言（若手 保彦 先生）

はじめに

平成29年度は、教科指導員として小学校2校、中学校1校、中高一貫校1校の計4校を訪問する機会をいただいた。「提言」と言えるほどの立派なものではないが、せっかくの機会なので、訪問を通じて感じたこと、また今後の取組の方向性について個人的に感じていることを英語教育の立場から述べたい。

学校訪問全体に関する感想

最も印象に残っているのは、訪問したどの学校においても、すれ違う児童生徒が元気にあいさつしてくれること、またそれが自然にできていることである。先生方の日々の粘り強い指導の成果であると思う。

最初の時間に行われる学校経営説明からは、各学校で特色ある目標が定められ、校長先生のリーダーシップの下、目標の実現に向けて組織として行動しようとする姿勢を感じた。一般授業においても、多くの先生方が工夫を凝らし、児童生徒の興味をひきつけるような授業を展開しており、教室に貼られている掲示資料などからも学習への意識を高めようとする先生方の努力をうかがうことができた。

英語および外国語活動の授業に関する感想

特定授業では、どの授業においても、児童・生徒と教師、児童・生徒同士のコミュニケーションが普段からとれていることが感じられた。また題材や活動の導入、活動で使うワークシートからも、授業者の様々な工夫や努力をうかがうことができた。

特に中学校の英語授業では、訪問した学校で（これまで多かった2人ではなく）3人以上の指導者がチームを組んで指導する体制がとられており、指導者が多くいることの利点を活かして生徒のコミュニケーション活動の機会を増やそうとする取組や、Warm-upでの会話練習等で基本的な表現の定着を図ろうとする取組が印象に残った。一方、小学校外国語活動の授業では、体育館を使って道案内を行う活動を取り入れた授業があったが、それぞれの目的地にクイズが設定されていて、道案内の活動を早く終えた児童が取り組める課題がきちんと用意されている点が印象的だった。

全般的にレベルの高い授業が多かった印象だが、ALTやT2の教員をより効果的に活用するための状況設定や、小集団（ペアやグループ）活動の進め方など、細かい点ではいくつか課題も見られた。特に気になったのは、授業の後半に行われることの多い、小集団での発表およびそれに向けた準備の段階である。今回はこの点に焦点をあててお話をさせていただく。

小集団学習のメリットとデメリット：特定授業に見られた課題

田畑（2014）は、グループ学習のメリットとして次を挙げている。

- ・コミュニケーション能力が育成される。

- ・楽しい雰囲気での学習できる。
- ・みんなで取り組むのでやる気が出る。

一方で、デメリットとして次を指摘している。

- ・他人に頼りすぎようになる。
- ・できる人だけで進んでしまう。
- ・参加しない人への不満が高まる。

参観した英語授業で行われていたグループ発表の準備作業では、楽しい雰囲気が作られており、多くの生徒が活動に熱心に取り組んでいた。その意味では、田畑（2014）が挙げているメリットは特定授業にも該当していたと言える。

しかし、生徒たちの作業を注意深く観察していると、発表原稿作成の段階で、英語ができる（であろう）生徒が書いた原稿を、あまり英語が得意ではない（であろう）生徒が一生懸命書き写す場面が見られた。これについては「英語の苦手な生徒には書き写す作業自体も学習の重要な一部である」という意見もあるかもしれない。が、田畑（2014）の指摘する「他人に頼りすぎようになる」「できる人だけで進んでしまう」というデメリットに該当しているようにも見えた。また、この関係が常態化してしまうと、英語ができる（ように見える）生徒にとって、書き写す（あまり英語が得意ではないであろう）生徒は、「活動に貢献していない」「参加していない」ととらえられ、田畑（2014）が指摘する3つ目のデメリットに該当する恐れがある。次期学習指導要領においても思考・判断・表現力が重視されている点からも、この状況には何らかの対応が必要であると考えられる。

小集団（グループ）での発表準備に関する提案および留意点

グループ学習のメリットを最大化し、かつデメリットを最小化するためには、ゴール（ここではグループでの発表）に向け、個々の生徒が何らかの貢献をするシステムを作ることが重要である。またその際には、次期学習指導要領が重視する思考・判断・表現力を育てられるような配慮も行いたい。これらの点をふまえ、グループ発表準備の作業として以下の指導手順を提案したい。

1. ブレイン・ストーミング

- (1) 各自で出されたお題についてアイデアを考える
- (2) 各自の意見や考えを他のメンバーに伝え、できるだけアイデアを出す

2. 原稿の流れを決める

- (1) ブレイン・ストーミングで出されたアイデアを分類・整理する
- (2) 話の要点を絞り込む
- (3) 要点を提示する順番を考える

3. 発表原稿作成

- (1) グループ内でそれぞれ原稿のどの部分を作成するか担当を決める
- (2) 決めた担当部分について、各自で作成する
- (3) 担当部分について各個人が作成した原稿を他のメンバーに伝え、内容が伝わるかどうかを確認する

4. 発表練習

- (1) メッセージの鍵となる語句の発音を意識しながら各自の担当部分を練習する
- (2) メンバー全員での予行演習を行う

上の指導手順のうち、「各個人の貢献」という意味でポイントとなるのは1 (1) および3 (2) の段階である。また「思考・判断」は1 (1)、2 (1)、2 (2)、2 (3) の段階と関係する。

活動の実施に際しては、手順に慣れるまでは(1)、(2)などの単位で細かく時間を区切って行い、慣れてきたら1～4のより大まかな単位で指示をしてもよいのではないかと。重要なのはグループ内に「自分がやらなくても誰かがやってくれる」という雰囲気を作らないことではないだろうか。

なお、グループ発表は、発表に慣れていない段階では発表者の不安軽減に役立つが、徐々にペアなど人数を減らす方向に持っていきたい。最終的に一人で発表できるようになれば、本当の意味で学習者の自信は育たないからである。

またグループ発表を行う際、全グループの発表にこだわる例が見られるが、同じような発表を見続けると聞き手の集中力は削がれ、その時間の学びの質が低下する可能性が高くなる。1回の授業で全体の前で発表させるのは3グループ程度にし、後はクラス全体の場で、発表になかった意見や考えを聞く形にした方が時間を効率的に運用できる。評価の関係で全グループに発表させたい場合は、授業時間外にビデオカメラの前で行う等のやり方を検討してもよいと考える。

【参考文献】

田畑忍 (2014) 「グループ学習を活性化するための役割」

http://www.tamagawa.jp/correspondence/about/column/detail_7449.html